



私のひとりごと

「不安な日々」

我が家で、18年もの長きに渡り飼っていた猫（名前はゴン）がご臨終を迎えた。人間で言えば90才ぐらいと思われる。ゴンとの出会いは家の前をヨチヨチと歩いていたところ、最初は家内と目が会ったらしく、その話を聞いた娘が連れ帰り、それで我が家に住み着く事になった。真っ白で目の色が左右で違い、片方は綺麗なブルーであった。



【日なたぼっこでおおあくびをするゴン】

我が家の猫は、田舎なので車にはねられる心配も少ない。なので、外への出入りは猫まかせの自由な飼い方である。ご自分で戸を開け散歩に出られる。開けっ放しの戸は、私達人間が閉めると言った具合で、その行為は真冬であれ夜中であれ、今も続いている。飼っていると言うのか、お食事付きでお家を貸していると言うべきなのか……。その様な環境のせいか、先に住み着いた猫がお友達？を我が家にご招待する。何度追いつてもご招待された猫は帰ってくるので、私も根負けしてしまい住み着く。そんな事の繰り返して、多い時には5匹もお泊りになっていた。その中でも、オス猫のゴンはボス的存在であった。やんちゃ盛りの頃は、ご近所の猫たちとの争いに明け暮れていた。戦いに出向く事もあれば、家の中に攻め込まれ迎え撃つなど、当時は白い毛

の何処かが血に染まっていた様に思う。そんなゴンも歳を重ねることとおとなしくなり、天気の良い日には日向ぼっこに外出するものの、多くは家の中で暮らす様になった。晩年になると今度は病気との闘いであった。皮膚がんにかかり、かゆいのか痛いのかは解らないが、爪でかきむしるので血だらけである。白い猫はなりやすいそうであるが、これといった薬も無いとの事……。足腰も弱り、ヨタヨタと腰を曲げて歩く姿は、見ていても気の毒である。高さ40センチぐらいの所から飛び降りるので、恐る恐る勇気を振り絞って飛び降りる様で、着地するが前足で体重を支えきれずアゴを打つ始末である。そんな姿を見るにつけ、歳を取るとはこういう事かと考えさせられた……。

亡くなる前には脳梗塞も患った。突然に暴れ苦しみ出したので、病院に連れて行く。ただ、連れて行く前にはもうこれまでかと言う思いもあり、家族全員と最後のお別れを済ませていた。ところが幸いな事に一命は取り留めたものの、下半身にマヒが残り自力で歩く事が出来なくなった。辛うじて動く前足で体を支えるのがやっとである。それからオムツを着けての生活であり、食事は抱きかかえてスプーンで少量ずつ与えるなど、赤ちゃんを育てているのと変わらない。我が家は昼間仕事で留守になるので、家内と娘が交代で時々帰り世話をする日がしばらく続いたが、先月眠るように息を引き取ったのである……。

18年も一緒に暮らすと、家族同然となる。特に家内にとっては癒し的な存在であり、その存在の大きさや功績は計り知れない。私と比べるまでもなく、だ。「あんたもゴンの様にならんよう、食事塩分を控えて体調管理せんとあかんで」「血压高かったら、はよう病院に行って見てもらわんと」などと、ゴンを看病していた時の家内は仲睦まじい夫婦の気遣いをみせてくれた。しかし、「ゴンやから面倒見とるけど、あんたやったら面倒見んで！」とのダメ出しの言葉には返す言葉を失った……。私もまた年々歳を取るわけだが、こうもハッキリと気持ちよく言われては、もはや覚悟？するしかないのだろうか……。ゴンのように手あつく扱われる自信がない。あの日以来、私はどこと無く不安な日々を過ごしている。

最後に。ゴンよ、安らかに。

ではまた来月もお会いしましょう。
今月も最後まで読んでいただき……、

あっぱれ
ございました!!

